

新型コロナウイルス感染症禍で小児看護学実習を 経験した学生の学び

Students' learning of child health nursing practice during the COVID-19 pandemic

空田 朋子¹⁾ 小迫 幸恵¹⁾
SORATA Tomoko¹⁾, KOSAKO Yukie¹⁾

要旨

本研究は、新型コロナウイルス感染症禍で小児看護学実習を行った学生の学びを明らかにすることを研究目的とした。

2021年度に小児看護学実習を実施した学生のうち本研究への協力を同意した49名の実習終了時に提出する「小児看護学実習評価表」の自由記載欄に記載された内容を研究対象とし分析を行った結果、5カテゴリー、10サブカテゴリーが抽出された。

学生は臨地実習を通して、新生児期から思春期までの様々な発達段階の子ども達と接することによって【発達段階に応じた関わり方】を学んでいた。また、子どもという対象の特性を理解し、【観察することの重要性】やケア時には『家族の協力が必要不可欠』であり【小児看護における家族】という大切な視点を学び取っていた。そして、実際に小児へのケアを通して『正確に安全で素早いケアの実施』や『恐怖や不安を軽減させる関わり』という【処置/ケア時の援助】に必要な関わり方や『測定技術の難しさ』を学んでいた。また、自宅に帰ってからも家族がしっかり子どもの看護が出来るように看護師には【継続看護への支援】の役割があることを学んでいた。

今回の結果から、新型コロナウイルス感染症禍で制限がある小児看護学実習でも臨地実習で習得すべき要素は学べていることが分かった。

キーワード：新型コロナウイルス感染症、小児看護学実習、学び

Key words : COVID-19, Child Health Nursing Practice, Students' learning

1) 山口県立大学看護栄養学部看護学科

1) Department of Nursing, Faculty of Nursing and Human Nutrition, Yamaguchi Prefectural University

I. 序論

2020年1月以降、新型コロナウイルス感染症（以下COVID-19）の感染拡大に伴い、全国の看護系大学などの養成施設では授業や実習の在り方を模索することを余儀なくされた。

COVID-19禍での看護教育における臨地実習のあり方については、文部科学省・厚生労働省から「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種などの各学校、養成所及び養成施設などの対応について」¹⁾（令和2年2月28日文部科学省及び厚生労働省による事務連絡）において、「実習施設の受け入れの中止などにより実習施設などの確保や代替えが困難である場合、実情を踏まえ実習に代えて演習または学内実習などを実施することにより、必要な知識及び技能を習得することとして差し支えないこと」と通達が出ている。2022年度においても、基本的には上記と同様の対応とする通知が「新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所、養成施設の対応及び実習施設への周知事項について」²⁾（令和4年4月14日文部科学省及び厚生労働省による事務連絡）において示された。

COVID-19禍における看護学実習への影響について、一般社団法人日本看護系大学協議会の報告書によると、2020年度実習内容・方法の変更となった科目は86.9%で、全く影響なく変更しなかった科目は12.9%のみであった。また、同報告書の中において小児看護学の領域は、89.0%が実習内容・方法を変更したと報告されていた³⁾。近年、小児看護学実習に関する研究においても、遠隔授業による小児看護学実習の実践⁴⁾やオンラインでの小児看護学実習の報告がされるようになってきた⁵⁾。

そのような時代背景の中、ごく少数ではあるが医療施設にて小児看護学実習ができていた学校もある。今回、COVID-19禍において病院施設で小児看護学実習を実施できた学生の学びを明らかにすることを研究目的とした。

II. 研究方法

1. 研究対象者

看護系大学に在籍する看護学科学生で、2021年度に小児看護学実習を実施した学生のうち、本研究への協力を同意した者を研究対象者とした。

今回の研究対象者となる学生の背景として、2020年度より講義・演習科目もオンライン授業が主体となり、学内で対面にて実施した授業は技術演習が主となっている。また、2020年度に成人看護学実習、老年看護学実習を終えているが、COVID-19の影響のため病院での臨地実習の日数が例年より減少し、減少した日数は学内実習へ変更された。

2021年度に実施した実習は、小児看護学実習・母性看護学実習・精神看護学実習・在宅看護学実習の各論実習を複数のグループに分けてローテーションにて実習を行っているが、母性看護学実習、精神看護学実習、在宅看護学実習は実習先の状況により学内実習が主となるグループも存在していた。その中で小児看護学実習においては、全グループでCOVID-19の感染拡大以前と同様に病院での臨地実習が実施できたという状況である。

2. 研究期間

2021年12月～2022年1月

3. データ収集方法

研究協力への同意を得られた看護学科学生が、小児看護学実習の終了時に提出する「小児看護学実習評価表」の自由記載欄に記載された内容を研究データとした。この自由記載欄には、小児看護学実習における実習の振り返りとして、実習の感想や自己課題等を記載している。

4. 分析方法

「小児看護学実習評価表」の自由記載欄の小児看護学実習の感想を書かれた内容から、小児看護学実習での学びに関する記述を抽出しコード化した。さらにコード化した学生の記述データからデータの類似性に着目して分類・集約したものをカテゴリーとした。

5. 倫理的配慮

実習終了時の提出課題を研究対象とするため、研究協力者である学生への倫理的配慮については強制力がかからないよう、小児看護学実習がすべて終了し、さらに成績評価が学生に公開されたのちに研究協力への依頼を文書及び口頭にて説明を行った。同意書の回収については回収ボックスを設け、研究者が直接受け取ることをしないよう配慮した。

なお、本研究は山口県立大学生命倫理委員会の承認を受けて行った（承認番号2021-27）。

Ⅲ. 結果

本研究への研究協力の同意が得られ、かつ「小児看護学実習評価表」の自由記載欄に記入漏れがなかったのは49部であった。本研究対象者となる学生の小児看護学実習の内容は、入院している小児患者を受け持ち看護過程の展開を行う小児病棟実習5日間、受診してきた小児患者の処置・診察の介助や見学、身体計測等の実施を行う小児科外来実習3日間、NICU/GCU入院中の患者を受け持ち、看護を見学するNICU/GCU実習1日間である。臨地実習の日数はCOVID-19拡大以前と同じ日数であったが、感染症予防の観点から、臨地実習における患児のベッドサイドに滞在する時間や回数、患児に関わる学生の人数などに制限は設けられていた。また、小児看護学実習を行った時期に全国的に子どものRSウイルス感染症が流行しており、小児病棟実習で学生が受け持つ患児も呼吸器感染症急性期の子どもが多かった。

小児看護学実習での学びに関する記述から抽出されたコード数は98件で、5カテゴリー、10サブカテゴリーが抽出された（表1）。以下、各カテゴリーについて説明をする。カテゴリーを【 】, サブカテゴリーを『 』、コードを「 」で示す。

表1 学生の学び

カテゴリー	サブカテゴリー
発達段階に応じた関わり方	発達段階に応じた援助の重要性
	発達段階に応じたコミュニケーションや関わり方の難しさ
観察することの重要性	観察することの重要性
処置/ケア時の援助	正確に安全で素早いケアの実施
	恐怖や不安を軽減させる関わり
	測定技術の難しさ
小児看護における家族	子どもと家族を一つとして捉える
	家族の協力が必要不可欠
	家族に対する援助
継続看護への支援	継続看護への支援

1. 【発達段階に応じた関わり方】

学生は小児看護学実習の中で様々な発達段階の子ども達と接して、「発達段階にあった説明や声掛けは大切と思った。今から行う処置について説明を児の発達段階に合わせて行うことが重要であると感じた」「子どもの年齢に合わせて説明の仕方や測定方法を変える必要があることを学ぶことができた」と小児看護で大切な『発達段階に応じた援助の重要性』を学ぶことが出来ていた。その一方で、「発達段階に応じたコミュニケーションを取ることが難しかった」「発達段階に応じた関わり方の難しさを痛感した」と実際、子どもに関わってみて『発達段階に応じたコミュニケーションや関わり方の難しさ』も感じていた。

2. 【観察することの重要性】

学生は外来受診する子どもや病棟で受け持った入院患児を通して、「主観的（S）情報が取れないからこそ、客観的（O）情報で全身状態を観察することの必要があることが分かった」と子どもを客観的に『観察することの重要性』を学んでいた。また、「看護師の細やかな観察で症状の悪化を防止することや治療の効果が出ているか確かめることが大切だと学んだ」と看護師として客観的に細かく子どもを観察することの目的も学ぶことが出来ていた。

3. 【処置/ケア時の援助】

小児科外来実習において学生は、乳幼児期から学童・思春期の子ども達への身体計測の実施や採血などの処置における介助を経験し、「小児を対象に処置や身体測定などを行う時、正確に安全に時間をかけずに行う事が大切であると学んだ」と『正確に安全で素早いケアの実施』が大切であることを実体験から学ぶことが出来ていた。また、様々な子どものケアの見学や実践を通して、「児に合わせた分かりやすい言葉を使ったりして、何をされるのだろうかという恐怖心を軽減する関わりがとても大切であると学んだ」「効果的なディストラクションを行うことが処置への恐怖や不安を紛らわせるために大切であることが分かった」と子どもの気持ちに寄り添った援助としての『恐怖や不安を軽減させる関わり』の重要性を学んでいた。そして、実際に子どものケアを実施する中で、「成人とは違い嫌がる児や体動がある児の測定や聴診・採血等は難しいと感じた」「小児は自分の動きを制御することは困難であり、思うがまま動いたりするため体動が激しく測定などを行う事の難しさを実感した」と子どもへの『測定技術の難しさ』を実体験から感じていた。

4. 【小児看護における家族】

学生は小児看護学実習を通して、「患児の健康を家庭で支えるのは家族であるため家族単位でアセスメントし、支援を行っていく必要があるのだと分かった」「第一に子どもと家族の両者を支援していく必要があると身を持って感じた」と『子どもと家族を一つとして捉える』ことの必要性を学んでいた。また「児だけではなく母親の協力があるからこそ小児看護を行うことができる」「家族に協力してもらいながらケアをしたり、日頃の様子を聴取しアセスメントしたりすることが、より良いケアを行う上で大切になってくると学んだ」と小児看護には『家族の協力が不可欠』ということも学んでいた。そして、「家族へのフォローも重要な看護であり、家族の安心した笑顔が児にも連鎖することを学ぶことができた」「家族の不安が取り除かれるような説明を行うことも小児看護を行う上で大切である」「親が児を観察することができるようなポイントや受診するタイミングなど、児の状態を正確に捉え判断できるような支援が大切である」と小児看護における『家族に対する援助』の重要性を学んでいた。

5. 【継続看護への支援】

病棟実習で受け持った患児の看護や退院後のフォローで外来受診してきた児の診察見学を通して、学生は「入院前から退院後まで継続的に支援していく事が大切」「退院後の自宅で家族が児の様子を見守りながら安心して生活できるようサポートすることも小児看護における看護師の役割である」と自宅に帰ってからも家族がしっかり子どもの看護が出来るように、看護師には『継続看護への支援』の役割があることを学んで

いた。

IV. 考察

1. 子どもの特性に関する学び

今回の小児看護学実習において、学生は新生児期から思春期までの幅広い年齢の子ども達と関わることで、子どもは成長発達過程であり小児看護では【発達段階に応じた関わり方】が重要であると学んでいた。その中で学生は、子どもの認知機能の発達により、コミュニケーションの取り方や説明の仕方が違うことや工夫が必要になってくることなど具体的な関わり方について実体験を通して学び取ることが出来ていた。また、言語能力が未熟で自分の症状を自ら発信出来ない子どもという対象の特性を理解し、「主観的（S）情報が取れないからこそ、客観的（O）情報で全身状態を観察することの必要があることが分かった」と看護師が子どもを【観察することの重要性】も学んでいた。そして、「児だけではなく母親の協力があるからこそ小児看護を行うことができる」「家族の不安が取り除かれるような説明を行うことも小児看護を行う上で大切である」と小児看護には何より『家族の協力が必要不可欠』であることや『家族に対する援助』の重要性を理解し、【小児看護における家族】という大切な視点を学ぶことが出来ていた。

COVID-19感染拡大前の宮良らの研究では、病院における小児看護学実習での学生の学びとして、カテゴリリー【子どもの特性を踏まえた援助】は、〈安心を与える環境づくり〉〈危険の回避〉〈子どもに合わせたコミュニケーション〉〈子どものやる気を高める〉〈観察の重要性〉〈発達段階に合わせた援助〉〈成長・自立を促す援助〉〈家族に対する援助〉〈遊びの提供〉の9つのサブカテゴリリーから構成されていたと述べている⁶⁾。

今回の小児看護学実習は、COVID-19禍での実習ではあったが、臨地実習病院の協力によりCOVID-19感染拡大前と同じ臨地実習の日数を確保していただいた。そのため、有意義な実習が行えており【発達段階に応じた関わり方】【観察することの重要性】【小児看護における家族】と先行研究と同等の学びを得ることが出来たと考えられる。一方で、COVID-19禍によりベッドサイドで子どもや家族と関わる時間も限られていたことから、【処置/ケア時の援助】に関する技術も「正確に安全に時間をかけずに行う事」の必要性をより実感できたのではないかと考える。

また、今回の小児科棟実習・小児科外来実習・NICU/GCU実習において、学生は各場所との連携や退院支援を実際に見学および一部実施する中で、自宅で子どもを看護するのは家族であり、『家族に対する援助』として「親が児を観察することができるようなポイントや受診するタイミングなど、児の状態を正確に捉え判断できるような支援」を行い、退院後も安心して生活できるように【継続看護への支援】の重要性を学び取ることが出来ていたと考えられる。

2. 臨地実習だからこそ経験できた学び

学生は、実際に子どもの身体測定やバイタルサイン測定、その他様々なケアを実施したことで「嫌がる児や体動がある児の測定や聴診・採血等は難しい」「小児は自分の動きを制御することは困難であり、思うがまま動いたりするため体動が激しく測定などを行う事の難しさを実感した」とケアの協力が得にくい子どもへの『測定技術の難しさ』を実習体験から学んでいた。また、【処置/ケア時の援助】において、嫌がったり泣いたりする子どもに対して『正確に安全で素早いケアの実施』をすることやまだケアについて理解出来ない子どもに対して効果的なディストラクションを行うことで『恐怖や不安を軽減させる関わり』の重要性についても実体験から学び取ることが出来ていた。これらの学びは、今回の実習において多くの学生が、ケアへの協力が得にくい乳幼児期の呼吸器感染症急性期の患児を受け持ち、ケアを実践することが多かったことも関係していると考えられる。

オンライン実習で小児看護学実習を行った北尾らの研究によると、オンライン実習においては【患児に直接触れることができなかった】という制約があるため、【バイタルサインの測定や日常生活援助が経験でき

なかった】といった意見がみられた。また、患児がモデル人形であることから【人形なので患児の表情や症状の観察ができなかった】との意見もみられたとオンライン実習での限界が述べられていた⁵⁾。

今回の実習において学生は、臨地実習病院の協力のもとで様々な発達段階の子ども達に直接触れ合っている中で、実際に身体測定やバイタルサイン測定を実施することが出来た。そして、子ども達の生の反応を体験出来たからこそ、子どもに必要な『正確に安全で素早いケアの実施』や『恐怖や不安を軽減させる関わり』という臨地実習でしか経験出来ない【処置/ケア時の援助】が学べたと考えられる。

COVID-19禍での臨地実習については、実習施設および学校側の様々な状況が影響しているのが現状である。実習施設の患者や家族、スタッフ、また学生の健康を守りつつ、今後の感染状況をみながら、学生にとってより良い学びに繋がる小児看護学実習を行っていききたい。

V. 結論

1. 学生は、新生児期から思春期までの様々な発達段階の子ども達と関わることによって【発達段階に応じた関わり方】を学んでいた。
2. 学生は、子どもという対象の特性を理解し【観察することの重要性】やケア時には『家族の協力が不可欠』であり【小児看護における家族】という大切な視点を学び取っていた。
3. 学生は、実際に子どもの身体測定やバイタルサイン測定、その他様々なケアを実施したことで『正確に安全で素早いケアの実施』や『恐怖や不安を軽減させる関わり』という【処置/ケア時の援助】に必要な関わり方や『測定技術の難しさ』を学んでいた。
4. 学生は、自宅に帰ってからも家族がしっかり子どもの看護が出来るように看護師には【継続看護への支援】の役割があることを学んでいた。

VI. 謝辞

COVID-19禍においても学生の学習機会を提供して下さった臨地実習施設の皆様に心より感謝申し上げます。

また、本研究へ参加協力に同意して下さった学生の皆さんに感謝申し上げます。

【引用文献】

- 1) 文部科学省・厚生労働省事務連絡：新型コロナウイルス感染症の発生にともなう医療関係職種等の各学校、養成所及び養成施設などの対応について。令和2年2月28日。
- 2) 文部科学省・厚生労働省事務連絡：新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所、養成施設の対応及び実習施設への周知事項について。令和4年4月14日
- 3) 日本看護系大学協議会 看護学教育質向上委員会 2020 年度 COVID-19 に伴う看護学実習への影響調査 A 調査・B 調査報告書 2021年4月
<https://www.janpu.or.jp/wp/wp-content/uploads/2021/04/covid-19cyousaAB.pdf>
- 4) 入江 亘, 菅原明子, 塩飽 仁：遠隔授業による小児看護学実習の教育実践、日本看護研究学会雑誌、44 (5)、697-706、2022
- 5) 北尾美香、福井美苗、植木慎悟、藤田優一：オンラインでの小児実習モデル人形を用いた小児看護学実習に対する学生の意見、武庫川女子大学看護学ジャーナルVol.07、41-51、2022
- 6) 宮良淳子、元山彩織、高田理衣：病院における小児看護学実習での学生の学びと指導のあり方、中京学院大学看護学部 紀要第8巻第1号、59-68、2018